

此の春

—お茶の水へ歸りて—

倉橋生

○建ものは人の手で出来る。自然は、なか／＼そういかない。われ／＼の幼稚園の復興にも、これが容易なことでない。なにしる焦土の跡、焼け砂の上だ。春が來たとて、空の色、風の軟かさに春が來たとて、此のみぢめな土に春は來ない。折角この春の雨さへ、たゞ、ぬかるみと、水溜りをつくるに過ぎない。

○此の不満足を胸にもつものは私達ばかりではなかつた。いゝえ、私達よりも、さぞかし、もつと不満足なのは子ども達であらう。私達の子どもの中には、丁度去年の春に初めてこゝに來て、青々とした草や、愛らしい草花に、楽しい幼稚園といふものを見出したものが澤山居る。それが、此の春は……と思ふだけでもつらい。

○子ども達の不満足は、——お部屋で、繪本で、玩具で、

お話で、唱歌で、それだけでは充たされない不満足は——保護者諸君の胸にもあつた。そして、藤棚がもち込まれた。花壇がもち込まれた。築山がもち込まれた。植込みがもち込まれた。黄ろい花が咲いた。紅い花が咲いた。白い花が咲いた。

○よろこんだものは私達子ども達ばかりではない。うれしそうな春風が、之れ等のともだちを訪ねに來た。『まあこれで春風にも申譯が立つ。』或は或る日、こんなことを獨りで言つて見たりした。

○しかし、春がだん／＼更けて來ると、私達は再び、例の誰れにでもある淡い暮春の回想といふものに捕へられた。といふと如何にも風流人の様だが、そんな譯ではない。たゞ、あの、花の時よりも勝れて嬉しかつた此の幼稚園の庭の、去年までの青葉を思ひ出したのである。ほんとうに此の幼稚園の庭は、古い大きい木の多い庭であつた。その一本々々が、長い枝を擴げ、廣い葉を擴げて、全園を綠に包んだものであつた。時には、息苦しくなる程に、綠の濃い庭であつた。それが今無い。何んにもない。一本もない。